

市では、現在新たなまちづくりの指針となる新総合計画の策定を進めています。計画を審議する総合計画審議会の委員の皆さんに、これからのまちづくりに期待することなどを伺います。



東北工業大学
副学長
建築学部建築学科 教授
渡邊 浩文 さん

プロフィール

都市環境工学の見地から、仙台のまちづくりに貢献。仙台市総合計画審議会まちと活力部会部会長のほか、仙台市環境審議会会長、杜の都の環境をつくる審議会委員なども務める

Q 環境・建築分野から見た仙台の特徴は？

A 仙台は市街地を中心に、西部に丘陵住宅地や山林地帯、一つの市の中に多様な気候と風土があります。例えば仙台の夏は、海から10キロメートルあたりまでは気持ちの良い涼しい風が吹きますが、その空気が市街地で加熱されて内陸へ押し込まれる傾向にあり、西部地域ではさらに気温が上昇。仙台の東部は岩手の盛岡と同じくらいの気温でも、西部は東京や福岡より高温になることがあるのです。日本は南北に細長い国土なので、寒い北と暖かい南では伝統的民家の建築様式が異なりますが、仙台でも、それぞれの土地に合ったまちづくりや適材適所の建築・

設計が大切になってきます。暑さや寒さから人を守る住宅設計はもちろんのこと、人が心地良く過ごせる場所をまちの中につくっていくことが重要です。居心地の良い所には自然と人が集まるようになり、まちのにぎわいや活性化にもつながっていくだろうと考えています。

Q 今後のまちづくりに期待することは？

A 総合計画審議会では仙台下らしいまちづくりを目指し、まずは「杜の都」の強化を基軸に議論を重ねています。環境・建築の観点からいえば、緑の多面的な機能を積極的に活用するグリーンインフラストラクチャーという考え方があります。街路樹がたくさんあると夏の日差しや冬の季節風から歩行者を守れるほか、屋上や壁面を緑化することで、室温上昇の緩和やヒートアイランド現象の抑

え、また建築物を設計・建設するときには、その建物の環境性能を向上させるだけではなく、敷地内の庭であったり、その外側の歩道であったり、周りの環境を含めて考えることが大事です。街路空間や都市空間そのものまで意識した設計が当たり前になると、街並みの統一感や杜の都の発展にも結びつくでしょう。日本の中で仙台が先んじてこうした建築設計やまちづくりに取り組んでいければ、大きな価値が生まれると思います。



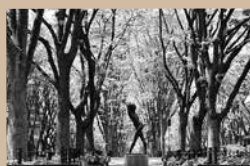
建物の壁面や屋上の緑化は、日差しを遮り室温上昇の緩和やヒートアイランド現象の抑制に役立ちます

「杜の都」の由来

皆さんは、仙台が「杜の都」と呼ばれるようになったいきさつを知っていますか。その歴史は古く、伊達政宗公がこのまちを治めた約400年前に端を発します。政宗公は建築資材の確保や飢饉に備えて、城下町での植樹や菜園作りを奨励。やがてまち全体がみどりで包まれるようになり、明治末期頃にはこの豊かなみどりをたたえる城下町の景観が「森の都」と観光案内書に記されました。

昭和初期には「杜の都」と呼ばれるようになり、戦災でまちのみどりの多くは失われましたが、青葉通や定禅寺通へのケヤキの植樹、公園の整備などを通じて「杜の都」は再生。都市環境が悪化する兆しを見せた高度経済成長期にも、この「杜の都」を大切にしている精神は受け継がれ、まちのみどりは守られてきました。

「杜の都」を次の世代に受け継ぐため、私たちにできることを考えてみませんか。



▲定禅寺通